



Title	ブリクセン文学にみる娯楽性：『復讐のしかた』 (Gengældelsens Veje) の解説のしかた
Author(s)	田辺, 欧
Citation	IDUN -北欧研究-. 2022, 24, p. 123-136
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/87442
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

[研究ノート]

ブリクセン文学にみる娯楽性 —『復讐のしかた』(*Gengældelsens Veje*)の解説のしかた—

田辺 欧

「牢獄に閉じ込められていながら、自分たちは囚人だとはっきり言うことさえ許されない人たちが、なにかのたのしみを求めるのは人間として当然のことよ。まじめな人たちも、そこまでとがめだてしてはいけないわ。今の今、すこしはたのしみがなくては、私、生きていけないの。」¹

1. はじめに

本稿においては紀要『IDUN』の22号および23号に引き続き、ブリクセン文学にみる娯楽性について検討したい。考察の対象はブリクセンが著した唯一の長編小説『復讐のしかた』(*Gengældelsens Veje*, 1944)である。本作には他の作品には一度も使用されなかったフランスの男性名ピエール・アンドレゼル (Pierre Andrézel) という仮名が用いられている。内容も怪奇ロマン、またはホラーファンタジーのようにテンポ良くスリリングで、章立ても細かく小見出しが多い。(後述するとおり、本の裏表紙に元は日刊紙の連載物として執筆されたと書かれている) そのためブリクセンの他の作品に比べると格段に読みやすい。作家自身によっても本作は「娯楽小説」であると庶子扱いされ、異色作であるがゆえにこれまでほとんど研究の対象になることはなかった。本誌前号、前々号で取り上げた掌編『まぼろしの馬』と同様である。しかし『まぼろしの馬』の考察にカイヨワの「遊びの概念」に基づく理論を当てはめた読み方が有効であったように、本作品も「娯楽性」に着目することで多様な解釈が可能かもしれない。実際ここ10年ほどのあいだにブリクセン研究に新たな地平が開かれつつあることが察せられる。

¹ ディネーセン著・横山 貞子訳、149。(引用箇所の下線は筆者による) 英語版に追加されたエピソードのようなもの。この作品が「娯楽のための小説」であることを本文の一部を引用する形で象徴的に表現しようとしている。横山は英語版からの訳を用いていると思われるが、その出典は明らかにされていない。原語では次のとおりである。“You serious people must not be too hard on human beings for what they choose to amuse themselves with when they are shut up as in a prison, and are not even allowed to say that they are prisoners. If I do not soon get a little bit of fun, I shall die.” (Pierre Andrézel, 1946. *The Angelic Avengers*. London, Putnam.)

2007 年よりデンマーク最大手の出版社ギュレンデル社とデンマーク語・デンマーク文学協会の協同で編纂が進められていたブリクセン全集が 2020 年に完結した²。この全集の特徴は原典に関する詳細な註釈と精緻な文献学的情報を盛り込んでいること、各巻の最後にブリクセン研究者による作品解題に匹敵する「後書」が付されていることである。

本稿は、テキスト分析に入る前段階として、『復讐のしかた』の出版背景、デンマーク国内受容、作家の意図などブリクセン文学において特異な点について、考察することを目的とする。ここに提示する情報は、上記の全集第 4 巻にあたる最新版³の「後書」(Efterskrift)にその大部を依拠している。翻訳ではなく、記された種々の書誌情報に基づき、原典にも可能な限りあたりながらそれら一連の情報を要約し考察を加える。

2. 『復讐のしかた』のあらすじ

本作はブリクセンの他の作品とは趣がかなり違い、ジャンルも娯楽小説であると指摘されているが、物語の時代設定は他の作品同様、19 世紀である。具体的には 1841 年の春から同年の秋までが舞台となっており、物語の舞台はイギリスとフランスにまたがっている。

小説は 3 部から構成される。第 1 部の「二人の友」では、この小説の二人のヒロイン、ルーカンとゾジヌが紹介される。ルーカンは科学者の孤児の娘であり、ゾジヌは大商人の家の跡取り娘である。物語は、ルーカンが家庭教師として住み込んでいた屋敷を離れ友人ゾジヌの実家であるトルトゥーガに避難するところから始まる。二人は以前寄宿学校で一緒だった。時あたかもゾジヌの家は彼女の誕生日を祝う大きな舞踏会の準備の真っ最中だった。しかしこの舞踏会は、ゾジヌの父親が破産し債権者から逃れるための策略でもあった。パーティーが終わると、ゾジヌとルーカンは全てを失ったなかに二人だけ取り残されることになる。仕事を探すためにロンドンに引っ越し、職業紹介所を通じて、牧師と名乗るペンハロウ氏とその妻に初めて出会う。ペンハロウ氏は、自分の子供を亡くした後、保護を必要とする少女たちを自分の家で受け入れていることを彼女たちに伝える。少女たちは彼の提案に同意し、ペンハロウ夫妻と共にフランスに向かう。

² 全集は全 7 巻からなる。Bd.1. *Den afrikanske Farm*, Bd.2. *Vinter-Eventyr*, Bd.3. *Syv fantastiske Fortællinger*, Bd.4. *Gengældelsens Veje*, Bd.5. *Sidste Fortællinger*, Bd.6. *Skæbne-Anekdoter*, Bd.7. *Skygge paa Græsset og essays*.

³ *Gengældelsens Veje*. 2013. Tekstetablering og redaction (註釈・編集) : Nicolas Reinecke-Wilkendorff. Efterskrift (後書) : Benedikte F. Rostbøll. Gyldendal & Det Danske Sprog- og Litteraturselskab.

小説の第2部のタイトル「サン・バルブ」は、フランスの田舎にあるペンハロウ夫妻が住む閑閑な農園のピンク色の家の名に因んでいる。ルーカンとゾジューヌはペンハロウ牧師の養女・弟子としてここに住むことになる。最初二人は古典を教える老牧師に尊敬の念を抱いていたが、サン・バルブの家政婦バティスティーンを手伝う少年クロンとの会話をきっかけに、この家にどこか不穏な空気を感じ始める。そんなある日警察官と判事が現れ、判事はペンハロウ牧師が若い女性を人身売買していると告発する。尊敬する老牧師をかばうゾジューヌの激しい言葉で、牧師の弁明はさらに強まる。しかし、夜になってゾジューヌは判事の告発が事実であることに気づく。以前にサン・バルブに住んでいた少女の一人、ローザが虐殺されたことが書かれた牧師宛の手紙をルーカンが発見したことで、その疑念は確信に変わる。二人はその手紙から、ローザは奴隷として売られたのではなく、預かった牧師の手下に反抗を繰り返した挙句、自ら蠟燭で顔を焼いて抵抗したために殺されたことを知る。そして彼女たちは、ローザの仇を討つために、サン・バルブに残ることを決意する。

小説の第3部「ローザの復讐を果たす」では、二人の少女がついに邪悪な牧師と闘い、ローザの復讐を果たそうとすることで物語はクライマックスを迎える。ゾジューヌは復讐によってペンハロウへの報復を求めるが、ルーカンの「許しと慈悲」の訴えによってペンハロウは自ら命を絶つことになる。姉と思われる妻も後を追って命を絶った。ルーカンとゾジューヌ二人の少女は以前からサン・バルブに出入りしていたイギリス人とフランス人の二人のハンサムな貴族と結婚するというハッピーエンドで小説は幕を下ろす。

3. 出版背景

本作はヨーロッパが第二次世界大戦の渦中にあり、デンマークがドイツの占領下の1944年秋、9月2日に出版された。著者名はPierre Andrézel（ピエール・アンドレゼル）、デンマーク語翻訳者はClara Svendsenと記された。アンドレゼルは当時デンマークでは無名の作家だったが、本の裏表紙ほぼ全面を使って生い立ちならびに作家活動が紹介されている⁴。表題は“Der hviler et Skær af Mystik”（謎めいている）で始まり、本文の“over Pierre Andrézels Liv”に続く。つまり「ピエール・アンドレゼルの生涯は謎めいている」である。著者は1915年、フランスのルーアン(Rouen)の生まれ、母親がイギリス出身であったために幼少時代から英語とフランス語を操り、オックスフォード大学在学時代よりフランスや英語の雑誌にエッセイや短編を投稿していたこと、小説『復讐のしかた』は日刊

⁴ *Gengældelsens Veje*. Pierre Andrézel. Paa Dansk ved Clara Svendsen. Gyldendalske Boghandel. Nordisk Forlag. 1944.

紙の連載として書かれたもので、各号に1章ずつ掲載され、最終章が出たのは第二次世界大戦勃発直前だったこと、だがその後の著者の行方は不明であること、最後にこの小説が単なる娯楽小説の域を超えていることを示唆し、著者アンドレゼルをエドガー・アラン・ポー、ロバート・ルイス・スティーブソン⁵など、当時の名だたる推理小説作家、怪奇小説家に並び称される作家だと宣伝する。その2年後に英語版 *The Angelic Avengers* (Pierre Andrézel. London, Putnam, 1946. pp.303, New York, Random House. 1947. pp.402)が刊行された。

本稿の冒頭に掲げたエピグラフは英語版に記されており、それは小説の一節を抜粋したものである。ところが最初に出版されたデンマーク語翻訳版のエピグラフには「この小説はフランスの事件簿 1840-1841 に記録された実際の出来事を題材にしている⁶」とある。初刊のデンマーク語版では、この小説が社会派サスペンスであることを匂わせ、2年後の英語版では一転して少女小説風な趣を前面に打ち出している。内容が全く同じものでありながら、最初のエピグラフの違いは異なる読者層を想定しようとした作者側の戦略とも考えられる。

このように本書は刊行当初から謎だらけであったにもかかわらず（あるいは謎だらけであったからか）、滑り出しは順調でわずか1ヶ月で第2版が刷られる。そして発刊後まもなくして書評が次々と掲載される。最初のうちは本の内容に関する批評であったものが、次第に書評の関心は無名の作家ピエール・アンドレゼルの正体を突き止めることへと移り変わる。つまりピエール・アンドレゼルは仮名であり、著者の正体は実はブリクセンではなかろうかと詮索することに終始するのである。この一連の書評、ブリクセン取材騒ぎは後に “Andrézel-affæren”（アンドレゼル事件）と呼ばれることになる。

4. 国内における受容とアンドレゼル事件

Rostbøll は2013年発行の最新版『復讐のしかた』の「後書」の中で本書の国内受容、つまり出版当時の書評全般、とりわけアンドレゼル事件について11ページを割いて詳細な調査を行っている (Rostbøll: 325-335)。そのなかで主だったところをまとめておきたい。

最初の書評が出たのは、出版後6日後、9月8日の主要日刊紙 *Berlingske Tidende* の夕刊においてであった。書評を担当したのは、Kai Flor という評論家であり、彼は出版社の情報（本裏表紙に書かれた著者、著作に関する内容）を疑うことも

⁵ Edgar Allan Poe (1809-1848), アメリカの詩人・小説家。『モルグ街の殺人』(1841)は世界最初の推理小説とみなされている。Robert Louis Stevenson (1850-1894), イギリスの小説家。『ジキル博士とハイド氏』(1886)は怪奇小説として名高い。

⁶ Denne Roman hviler paa en virkelig Begivenhed, som omtales i de franske Politianaler 1840-1841.

なく、本の創作意図（アイデア）はパスティーシュ小説（Pastische-Roman）もしくはガヴァネス・ホラー小説⁷（Guvernante-Gyser）だと決めつけた。Flor はその後『復讐のしかた』のレビューを、別の日刊紙 *Kristeligt Dagblad* に「-n」という署名で一度だけ投稿しているが、その際も本のテーマについて「許しと慈悲」（tilgivelse og nåde）であるということを述べるにとどめている⁸。

それ以外の初期の書評も文体については肯定的なものが大半を占める。特徴を列挙しているところを Rostbøll（2013：325）の後書からそのまま引用する。

文体的には洗練されたものでかつ貴族的⁹、そして優美¹⁰であり魅惑的¹¹である。作者は最高の技巧を有し¹²、第一級の娯楽小説であり¹³、優れた文学的パスティーシュ¹⁴である。小説のテーマは悪に対する善の戦い¹⁵と、悪に対する愛の強大な勝利¹⁶とみなされ、レビューでは、〈洗練されたエンターテインメント¹⁷〉、〈神経を逆なでするような読み心地¹⁸〉などエンターテインメント性と刺激性を兼ね備えた作品であるとの評価を受け、中には〈悪魔的なほど刺激的¹⁹〉などという声も上がっていた。批評の大方は『復讐のしかた』のジャンルを決定することに注力し、最終的にはゴシック・ホラーであり、ヴィクトリア朝のガヴァネス小説（ジェーン・オースティン、シャーロット・ブロンテ）とロマン主義的な幻想物語（エドガー・アラン・ポー、E.T.A.・ホフマン、ロバート・ルイス・スティーブンソン）のパスティーシュとしての性格を持つという異口同音の結論に落ち着いた。

しかしながら、出版されてすでに 17 日後の 9 月 19 日には『復讐のしかた』の著者ピエール・アンドレゼルを作家ブリクセンと結びつけようとする書評が *Sorø*

⁷ ガヴァネス小説＝女家庭教師が登場する、19 世紀ヴィクトリア朝時代のイギリス小説を指す。

⁸ Kai Flor (-n). "Gengældelse", i: *Kristeligt Dagblad*, 23. september 1944.

⁹ Knud Nielsen. "Karen Blixen under nyt Pseudonym?", i: *Sorø Amtstidende*, 19. september 1944.

¹⁰ Kai Friis Møller (Bookman). "En 'gotisk' Fantasi", i: *Ekstrabladet*, 24. oktober 1944.

¹¹ Kai Flor (-n). "Gengældelse", i: *Kristeligt Dagblad*, 23. september 1944.

¹² Svend Erichsen. "En dansk Roman af internationalt Snit", i: *Social-Demokraten*, 1. november 1944.

¹³ T.O. Veibel(Tov.). "Fantastisk Historie", i: *Børsen*, 1. oktober 1944

¹⁴ Kai Friis Møller (Bookman). "En 'gotisk' Fantasi", i: *Ekstrabladet*, 24. oktober 1944.

¹⁵ Axel Manicus-Hansen. "Hvem er Pierre Andrézel?", i: *Aalborg Amtstidende*, 30. oktober 1944.

¹⁶ Svend Erichsen. "En dansk Roman af internationalt Snit", i: *Social-Demokraten*, 1. november 1944.

¹⁷ Harald Engberg. "Kriminalhistorie i Krinoline", i: *Nyborg Socialdemokrat*, 5. december 1944.

¹⁸ Ibid.

¹⁹ Ibid.

Amtstidende という地方紙に掲載される。書き手は「新しい仮名のカーアン・ブリクセン？」というタイトルのもと、文体を「貴族的」と評した(脚注9) Knud Nielsen だった。Nielsen は、「この本のロマン主義的な文体、貴族的な趣全体、洗練された知的な雰囲気は、著者がカーアン・ブリクセンであることを示している²⁰」と論じた。彼は、カーアン・ブリクセンがあまりにも有名な作家になってしまったために、仮名を使う機会を逸してしまったと考え、「カーアン・ブリクセンのような作家は、もはやどんな仮名を使っても身を隠すことはできない。標的は必ず彼女を暴く²¹」と述べている。

その後も『復讐のしかた』の著者の正体を暴こうとする記事が続いた。先の Knud Nielsen 以外にも Carl Johan Elmquist (*Politiken*), Kai Friis Møller (*Ekstrabladet*), Axel Manicus-Hansen (*Aalborg Amtstidende*)らは書評の中で仮名の使用についてもっとも論争的な見解を示し、仮名は暴かれるべきであるという点で一致していた(Rostbøll 2013: 326)。とりわけ Elmquist は批評の冒頭で、謎の人物ピエール・アンドレゼルの正体をはっきりしないことを「問題」視し、この問題を解決することこそが「文学的私立探偵」の仕事であるとわざとらしく唱え、記事のあちこちで非常に皮肉っぽい、嫌味っぽい口調を呈した。さらには顔を半面仮面で覆い黒いドレスを着た女性の写真を添え、キャプションには、“ピエール・アンドレゼル 背後には Rungsted Kro がほのかに見える!”と記した。(Rostbøll 2013: 326-27)。

またこのアンドレゼル事件に関しては、当時の名だたる文芸評論家、作家も関係する事態となった。最初に口火を切ったのは作家の Jacob Paludan²²である。彼は9月19日の日刊紙 *Nationaltidende* において、アンドレゼルはカーアン・ブリクセンの偽名に違いないと示唆した。Paludan は『復讐のしかた』が「ポーヤステューブソン、ブリクセン＝フィネケのような作家」を彷彿させると言い、さらにこの小説の作者がまさしく第二次世界大戦という理由から自らの名を伏せたのではないかと指摘した。「ピエール・アンドレゼルは姿を消した。それゆえ、彼のことはあまり知られていないが、カオスが収まれば、読者はいつか彼が再登場することを期待するだろう」と述べた²³。

²⁰ Kund Nielsen. "Karen Blixen under nyt Pseudonym?", i: *Sorø Amtstidende*, 19. september 1944.

²¹ Ibid.

²² Jacob Paludan(1896-1975), デンマークの作家。アメリカやエクアドルに1年間滞在した経歴を持つ。新聞評論家としても活躍した。ビルドゥングスロマン *Jørgen Stein* (『ヨーアン・スタイン』: 1932-33) で青春の作家としての地位を確立し、後はエッセイの執筆に専念するようになった。

²³ Jacob Paludan. "Litterær Kriminalroman", i: *Nationaltidende*, 19. september 1944.

次に登場したのは Hans Brix²⁴である。Brix は 10 月 3 日の日刊紙 *Berlingske Tidende* で、まず「コンマの不規則な打ち方を見れば、この作品が女性によって書かれたのだとわかる」と指摘し、仮名の使用については作者が仮名を使用するのは芸術的な理由があるのではないかと述べ、「彼女の小説のトーン自体がまさに彼女の名前の不明瞭さを要求しているのだ。本の形態はパスティーシュであり、芸術によって生み出されたパティナ(古色)、つまり古風な響きを備えている」(下線は筆者による)と、仮名に対する批判というよりむしろ仮名を用いた理由を文体上、芸術上のものであると解釈した²⁵。さらに以下のようにも述べる。

この美しい小説の著者が名前を隠したかったとすれば、それは暴かれまいよという願いからではなかったのかもしれない。文学において無名であろうとすれば、逆説的ではあるが、すでに無名でなければならない。著名な作家であれば必ず追跡される。著者がこのことを事前に知らないはずがない²⁶。

これを読む限りは、Brix も他の書評家たちのようにブリクセンが仮名を使ったことはすでに見通しているが、仮名の正体を明らかにすること自体に意義を見出しているとは思えない。仮名の使用は人々の関心をブリクセン延いては作品そのものに向けるがための文学的戦略だと考えていたのではないだろうか。Brix はさらに 1949 年に上梓した *Karen Blixens Eventyr* (『カーアン・ブリクセンの物語』) のなかでフランス語の Pierre Andrézel という名前がそれほど無作為に選ばれたものではないことも指摘している。Brix によれば、この小説はヒトラー政権下のドイツとレジスタンス軍の関係の寓話として読むことができ²⁷、ドイツ人の疑いを避けるためにブリクセンはフランス名を選び、行方不明のアンドレゼルの伝説を作らなければならなかったと言及する²⁸。また Andrézel という名前には、文学的な引用の可能性があること、フランスの作家フランソワ＝ルネ・ド・シャトブリアンの『墓の彼方の回想』(*Mémoires d'outre-tombe*: 1848-1850) に、18 世紀末のフランス貴族の名として登場すると同書の中で付記²⁹している。名前の由

²⁴ Hans Brix(1870-1961)、デンマークの文学者。1924-41 年、コペンハーゲン大学でデンマーク文学をコペンハーゲン王立芸術アカデミーでは演劇理論を教える。1924-31 年 文芸・演劇評論家としても活躍した。

²⁵ Hans Brix. "Usædvanlig dansk Roman", i: *Berlingske Tidende*, 3. oktober 1944.

²⁶ Ibid.

²⁷ この見解を最初に示唆したのは、後述する Ole Wivel であり、また作者ブリクセン自身も第二次世界大戦時のドイツとドイツの占領下にあったデンマークの関係が本作の背景にあることを後に述べている。

²⁸ Brix 1949: 251.

²⁹ Ibid.: 252.

来についてはブリクセン研究者の Else Brundbjerg も著書 *Kvinden Kætteren Kunstneren Karen Blixen* (『女性 異端者 芸術家 カーアン・ブリクセン』: 1985) において、ブリクセンが象徴派詩人 Sophus Claussen³⁰に熱中していたことを取り上げ、ブリクセンが彼の著書 *Fortællingen om Rosen*(『薔薇の物語』:1927) から名前のヒントを得た可能性を示唆している。『薔薇の物語』には、Pierre Andrée という人物が登場するが、才能はあっても直情的で品位のない二流の政治家として描かれる。これはブリクセンが自らを Pierre Andrée になぞらえ、『復讐のしかた』を出版した際にただ経済的な必要性にかられて自分の才能を濫用したと感ずることもできたのではないかと³¹、と述べている。さてこうした国内における一連のアンドレゼル事件に対して、標的となっていた当の本人ブリクセンはどのように応答したのだろうか。

5. 作家ブリクセンの意図

9 月半ばからほぼ 2 ヶ月間、ブリクセンは公の場ではいかなる記事に対してもひたすら沈黙を守り、Pierre Andrézel が自らの仮名であること、ならびに小説へのクレジット表示を一貫して拒否してきた。ところが、Kaj Thaning³²が 11 月 19 日に *Nationaltidende* に投稿した "Et Stykke litterært Detektivarbejde" (「文学的な探偵一話」と称する評論で、ブリクセンの主要作品『七つのゴシック物語』、『アフリカの農園』との比較を行い、作品における「神」理解に共通性があると言及し、『復讐のしかた』はブリクセンによって書かれたものであるに違いないこと、さらにはこの作品が元々は英語で書かれたもので後に翻訳されたのではないかと、あるいはブリクセンの若い頃に書かれた作品ではないかとの見解を示した (Rostbøll 2013 : 328)。この時期を境にブリクセンの沈黙が破られていく。

Thaning の投稿が世間に出た翌 20 日、*Berlingske Aftenavis* (日刊 *Berlingske Tidende* の夕刊版) は、ブリクセンに対して電話でのインタビューを申し入れ、彼女はそれに応じた。同日この電話インタビューに基づく記事「なぜ仮名の作家はそっとしておいてもらえないのか」³³が掲載された。その記事でブリクセン自身が発言したことを要約すると、①『復讐のしかた』を書いたのは自分ではないが仮名を使う筆者に同情している ②誰が書いたのかを重要だとみなすことが愚

³⁰ Sophus Claussen(1865-1931)、デンマーク象徴派詩人。学生時代、ゲオルク・ブランデスを中心とする急進派に加わるが、ヨハネス・ヨルゲンセンら、後にデンマーク象徴主義詩を生み出すサークルと出会う。またフランス・パリにおいて象徴主義の旗手、ポール・ヴェルレーヌの仲間入りを果たす。

³¹ Brundbjerg 1985: 116-17.

³² Kaj Thaning(1904-1994)、デンマークの神学者。1938-73 年フューン島のアスペロプの教区牧師。

³³ Bene Larsen (bene). "Hvorfor kan Pseudonymer ikke være i Fred", i: *Samtaler med Karen Blixen*, 116-17. (*Berlingske Aftenavis*, 20. november 1944.)

かであり、誰が書いたとて内容は同じである ③ピエール・アンドレゼルに関する情報はすべて出版社グーレンデルから提供されている ④書いたのが仮に本人でない場合、なぜその人を強制的に名乗り出させようとするのか、それはほとんど迫害に近い。なぜ仮名の作家はそっとしておいてもらえないのか、この4点であった。しかしこうしたメディアに対するブリクセンからの強い非難があったにもかかわらず、翌日の21日、彼女はもう一度仮名の本人確認を求める電話に捕まり記事にされる。前日と同様、ここでもブリクセンは頑なに『復讐のしかた』の作者であることを拒否し、記者からの質問「作者が誰なのか、文学史的に興味深いと思いませんか？ 作品というのは、関係性において理解されるべきものですよね」に対して、「たしかに... しかし、『復讐のしかた』のような小説に文学史的な面白さはあるのでしょうか？ 私はそうは思いませんね、いずれにせよ、作者自身の視点で見るとべきであり、アンドレゼルは仮名のままでよいのですよ。作家には作家なりの理由があるのです」と答えた³⁴。このように二日連続でブリクセンの声が初めて公表されたことにより、アンドレゼル事件は新たな展開を迎えることになる。

アンドレゼル事件の最後に触れておくべきは、作家 Ole Wivel³⁵ の存在であろう。Wivel は前述の作家 Paludan や文学者 Brix と違い、ブリクセンの個人的な友人として、途中からは彼女の要望に応え、半ばブリクセンの声を代弁する形でアンドレゼル事件に関わっていたことがわかる。ブリクセンがメディアに「アンドレゼルは仮名のままでよい。それには理由がある」と意見を述べたことで、メディアの関心は「アンドレゼルはブリクセンの仮名ではないのか？」から「なぜブリクセンは『復讐のしかた』を仮名で出版したのか？」へと変わる。この論戦に積極的に関わったのがまさに Wivel だった。

Wivel にとって、『復讐のしかた』はドイツによるデンマーク占領の寓話として読まれることを意図して書かれたものであること、ブリクセンが占領軍からの検閲などを避けるために仮名で出版したことは疑いようもないことだったと Rostbøll は述べている(2013: 329)。そのことは、Wivel の著書 *Karen Blixen. Et uafsluttet selvopgør* (『カーアン・ブリクセン 未完の自己対決』: 1978) における、「洞察力のある読者なら誰もが、カーアン・ブリクセンが例の胸くそ悪いペンハロウ牧師が部屋に閉じ込めて殺そうとした無垢の少女の物語を書いて、持ち前

³⁴ Ukendt (eu). "Jeg kunde godt selv finde paa at lege Opdager", i: *Samtaler med Karen Blixen*, 117-18. (*Nationaltidende*, 21. november 1944.)

³⁵ Ole Wivel(1921-2004), デンマーク人作家、詩人、雑誌 *Heretica* (『異端』) 編集者、行政官、討論者など、その多面的な活動により、第二次世界大戦後のデンマークの文化活動の中心に位置づけられた。ブリクセンとは文芸誌 *Heretica* を通じて個人的に深い繋がりを築いた。

のユーモアと自己防衛精神を縋い交ぜにして占領軍を嘲笑したのだということを疑わなかった³⁶」という一節にも見出される。

ブリクセンは1944年10月14日に出された第2版でわずか一文の加筆を行っていた。加筆された部分はこの小説が実際にはデンマーク人の作家によって書かれていることを示唆するものだった。11月19日のThaningの投稿以来、連日ブリクセンは電話での取材でメディアと応戦していたが、この機会にブリクセンは加筆した部分が世間に明らかにされるよう、新聞に投稿することをWivelに依頼する。Wivelは匿名”Detective”「探偵」を用い、1944年11月22日付の*Nationaltidende*に寄稿した。第2版の第2部の後半”Samtale om Natten”（「深夜の語らい」）のところに以下の下線の一文³⁷が加わっていることを発見したこと、さらにこの文章を読めば作家がデンマーク人だということがある種証明されるだろうと述べたのである。

彼ら（ペンハロウ牧師夫妻）にかかったら、世界中の娘たちは誰だって危険にさらされるわ。でも私たちは違うのよ。私たちは綺麗な素敵な、小さな籠の中で飼われている彼らの2羽の小さなカナリアなのよ。

この加筆された下線文の中の「カナリア」は、イギリスの海軍大臣ウィンストン・チャーチルが第二次世界大戦中、ヒットラー支配下のドイツに占領されたデンマークを指す呼称として用いたものであった。ブリクセンはこのWivelの寄稿によって「仮名の正体を暴こうとする」愚かな記事がデンマーク人と思しき著者を危険に晒すことになるのだということを世間一般に知らせようとしたのだろうか。先述したとおり、ブリクセンが占領軍からの検閲などを避けるために仮名で出版したことには間違いないだろうが、ブリクセンが仮名を用いる意図はもう一つ別の理由があったように思われる。

ブリクセンはWivelに記事の寄稿を依頼した翌日に、自らもまた*Berlingske Aftenavis*に「仮名と『復讐のしかた』をめぐる」というタイトルの記事を実名で寄稿した³⁸。冒頭で前もって『復讐のしかた』への関与を否定している一方で、記事の内容は、仮名の使用ならびに匿名の権利を擁護するという、創作に対する

³⁶ “ingen indsigtfuld læser var i tvivl om, at Karen Blixen på sin egen humoristisk-selvopholdende måde havde forhånet besættelsesmagten med fortællingen om de uskyldige piger, som den modbydelige pastor Penhallow spærrer inde og stræber efter livet”, Wivel 1978: 131.

³⁷ この下線箇所は2013年に発行された初版に基づく完全版には見られないが、ペーパーバック版などは第2版以降の版が採られている。加筆の原文は“Vi er deres to små kanarie-fugle i et fint, net, lille bur.”である。

³⁸ Karen Blixen. ”Om Pseudonymer og *Gengældelsens Vej*”, i: *Berlingske Aftenavis*, 23. november 1944.

ブリクセンの根本的な考え方を提示するものだった。またブリクセンは「この小説が第二次世界大戦中の特殊な時期に出版されたことに関連して、戦時中の強制的な監禁状況の中で、著者と読者の両方に娯楽と（戦争を）忘れる時間を提供するために書かれた本だと想像している」（下線は筆者による）と述べたのだ（Rostbøll 2013：331）。

ブリクセンのこの寄稿こそまさに作者の『復讐のしかた』の創作に対する意図とみてよいだろう。とりわけ最初の下線部分は、ブリクセンの創作全般に通底している。さらに Rostbøll の解説からは、ブリクセンが仮名を使うことを以下の3つの観点から言及していることがわかる。1点目は、作家が仮名を用いることを「王子の“お忍び”の旅」（“fyrsten, der rejser *inkognito*）になぞらえていることである。王子がお忍びの旅で自由を手に入れ成長を遂げるように、作家は仮名でもって表現の自由を手にし、創作を展開していくことができると考えた。2点目は「仮名は読者との駆け引きである」（“et Pseudonym er Leg, hvor Læserne må lege med”）と述べていることである。つまり仮名とは作者と読者の共創によってもたらされる一種の遊び、つまり娯楽だと捉えている。3点目は「仮名は見せかけやごまかしではなく、仮面である」（“et Pseudonym er ikke noget Bedrag, det er en Maske”）と述べていることである。さらにブリクセンは仮面の人物を前にして、その仮面の奥に隠れている人物を探ろうとするのは、「機知」と「精神性」が欠如していると批判する。『復讐のしかた』の発刊当初から著者アンドレゼルの正体を暴こうとした数多くの書評家、評論家、メディアに向けられた皮肉あるいは非難とも取れるだろう。

「仮名」はブリクセン創作活動全体におけるキーコンセプトである。また「仮名」を「仮面」あるいは「遊び」と同義で捉え、あくまでも「仮名」問題に対して一貫した姿勢を崩さなかった作者ブリクセンの意図は『復讐のしかた』の創作を通じて見事に表明されていると言えないだろうか。

6. おわりに

本稿では『復讐のしかた』の出版背景、デンマーク国内における受容、作品に向けられた作者の意図などブリクセン文学において本作品の持つ特異な点について考察と論考を行った。これまで純文学扱いされず、娯楽小説としてほとんどブリクセンの研究者によって顧みられることのなかった異色作の魅力にあらためて開眼するきっかけとなった。

これまで他のブリクセン作品には一度も使われなかった仮名が用いられた経緯、仮名「ピエール・アンドレゼル」の正体をめぐりメディアで繰り返されたコントにも似た探偵ごっこ「アンドレゼル事件」、その背後でほくそ笑む作者の顔

を思い浮かべながら、次回はテキストそのものに迫り以下のような観点からの分析を想定している。

1. テキストにみる娯楽的要素
2. ジャンルのパステイシュー的要素
3. 本作を現代の文学研究の文脈において読み直す可能性

1.に関してはテキストに込められた娯楽的要素を扱う。要素として考えられるのは、この作品の構造（章立て）、出来事の時間的配列、人物造型とその配置である。これらに注目することで、ミステリー要素、すなわち娯楽小説としての特性を見出すことができるだろう。2.に関してはデンマーク語版と英語版で小説冒頭のエピグラフに違いがあることは、本稿で指摘したが、このエピグラフの違いはジャンルの違いとも大きく関連している。作者がそれぞれにおいて異なる読者を想定していることについて、より深く掘り下げてみたい。3.に関しては、現代における文学批評の力を借りる読みである。これまでこの作品が学術的な研究の対象にされてこなかったのは、娯楽小説というものが文学研究において等閑視されてきたことと関連している。しかしながら、ブリクセンの創作活動において「娯楽・機知」といった概念、仮名・仮面を用いてジェンダーの攪乱を企む「遊戯」、作者と読者の共創による「遊び」は無視することができない。それらを読み解くためには文学社会学的批評、読者反応批評、ジェンダー批評などの批評観点から本作を読み直すことで新たな解釈の可能性が広がるのではないかと考えている。

Det fornøjelige hos Karen Blixen

– En læsning af *Gengældelsens Veje* –

Uta Tanabe

Resumé

I denne artikel vil jeg i forlængelse af nr. 22 og 23 af tidsskriftet *IDUN* undersøge Blixens litteraturs underholdende karakter. Emnet for min undersøgelse er Blixens eneste roman, *Gengældelsens Veje* (1944). I denne roman bruger Blixen pseudonymet Pierre Andrézel, et fransk navn, som hun aldrig har brugt i sine andre værker.

Historien udfolder sig hurtigt og indholdet er meget spændende, som en romantisk gyser, og kapitlerne er detaljerede og fulde af underoverskrifter. (Som vi skal se, står der på bogens bagside, at den oprindeligt blev skrevet som en føljeton til et dagblad). I forhold til Blixens andre værker er den letlæselig, hvilket af forfatteren selv er blevet behandlet som "et illegitimt barn", og derfor har bogen sjældent været genstand for forskningen. Det er også tilfældet med "Spøgelseshestene" ("The Ghost Horses"), en lille novelle, som jeg i *IDUN* nr.23 har analyseret. Men ligesom det var unikt at læse denne novelle ved at anvende teorier baseret på Caillois' "legebegreb", kan der også være mange forskellige fortolkningsmuligheder i *Gengældelsens Veje*, når man fokuserer på dens "underholdende" karakter.

Blixens samlede værker, som siden 2007 er blevet redigeret i samarbejde med Danmarks største forlag, Gyldendal, og Det Danske Sprog- og Litteraturselskab, blev færdige i 2020. Det særlige ved denne samling er, at den indeholder detaljerede noter og meget grundige bibliografiske oplysninger samt et "efterskrift" af en Blixen-forsker.

Som et indledende skridt til en tekstanalyse har denne artikel til formål at diskutere nogle aspekter af *Gengældelsens Veje*, som er unikke i Blixen-litteraturen, såsom baggrunden for udgivelsen, dens modtagelse i Danmark og forfatterens hensigt med bogen. De oplysninger, der præsenteres her, er baseret på efterskriftet til den seneste udgave (2013) af Benedikte F. Rostbøll.

使用テキスト

- Blixen, Karen. *Gengældelsens Veje*. 2013. Gyldendal & Det danske sprog- og litteraturselskab. (Originalen: Andrézel, Pierre. På dansk oversættelse af Clara Svensen. Gyldendal, 1944)
- アイザック・ディネーセン著・横山 貞子訳. 1981. 『復讐には天使の優しさを』(ディネーセン・コレクション4). 晶文社.

参考文献

- Blixen, Karen. 1960. *Skygger paa Græsset*. København: Gyldendal.
- . 1965. *Samlede essays (Heretica*, nr. 5, udg. af Thokild Bjørnvig) ”Breve fra et Land i Krig”. København: Gyldendal.
- Brix, Hans. 1949. *Karen Blixens Eventyr*. København: Gyldendal.
- Brundbjerg, Else. 1985. *Kvinden, Kætteren, Kunstneren Karen Blixen*. København: Carit Andersens Forlag.
- . 2000. *Samtaler med Karen Blixen*. København: Gyldendal.
- Henriksen, Liselotte. 1999. *Blixikon*. København: Gyldendal.
- Rostbøll, Benedikte F. 2013. ”Efterskrift”. *Gengældelsens Veje*. Gyldendal & Det Danske Sprog- og Litteraturselskab.
- Wivel, Ole. 1987. *Karen Blixen. Et uafsluttet selvopgør*. Aarhus: Systime.